方に引かれ、北方作戦準備に專念して鐵道隊の此等の企図に対しては「若干の支援を與へた」と云ふ程度に過ぎなかった。

第二節　昭和十七年秋期より米軍の「レーテ」上陸前迄に於ける鐵道作戦指導

一　本期に於ける鐵道作戦一般の経過

南方作戦の一段落と共に国軍は全般に亘り其能力を整へ、当期的に兵備を強化して次期作戦に應ぜんとし、方に於て対重慶進攻

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

作戦を企図して、北方満洲に対しては「昭和十八年」春以降「対蘇戦」の生起することあるべきを考慮して愈々其戦備を強化した。

こうした情勢にあって、浙贛作戦に於て取得した鉄道資材も北陸に於て撤去した一部鉄道資材も奪ひて北方へ集積を断行する事大本営の鉄道作戦指導方針は名実共に伝統的な対北方重点主義に帰り益々之を推進して行った。

併しながら南方、東南太平洋方面にあっては勢に乗じて「フィージー」と「サモア」の諸島を攻略し米濠の連絡を遮断せんと策する迄に至った我軍の作

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

戰も昭和十七年夏に於けるミッドウェー海戰や「ガダルカナル」作戰の失敗を轉機として攻守所を異にするやうになり次で昭和十八年九月には東部ニューギニヤより、ソロモン島を經て、マーシャル群島を結ぶ東方第一線の守りを失はんとし、終に国軍作戰指導の方針を変更バンダ海カロリン群島の線に防備を整へ專ら米英に対するの止む無きに至り北方に対しては「成し得る限り戰備を強化し米蘇の提携を断ち対蘇戰の生起を防止す」べき方針の下に逐次満洲の精鋭を減ずかて中部太平洋に投入するやうになった。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

この様な国軍作戦指導方針の根本的変革に伴って大本営鐵道作戦指導の方針も亦変革の余儀無き状況となり昭和十八年十月永年に亘り堅持された対蘇作戦準備第一主義の方針を一擲し国軍作戦指導の方針に即應する様になった。

前記

次で昭和十八年十一月に行はれた大本営の機構改革によって富士の鐵道課（第九課）は廃止され船舶課たる第十課に統合され鐵道船舶の綜合輸送力の発揮を期して益々新方針に應ずる鐵道作戦指導を推進する様な態勢を築いた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

保一なら昭和十九年六月にはサイパン島に対する米軍の上陸を見、同年九月に中部太平洋全域の守を失い此島一本土の線に於て米軍と決戦を敢行せねばならない状況となる。

此の間南方に於ては一時華々しい軍政時代建設時代を経過し此の頃鐵道の復旧輸送力の回復等見るべきものがあった。

軍方よりする米軍の攻勢に呼應した英印軍の西方よりの攻勢に会して昭和十九年三月頃インパール作戦を敢行したが遂に失敗に帰し南方軍政変更の見積り本格的防衛作戦へと移行した。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一方支那に於ては情勢の進展と共に米英の反攻に呼應する共産の活動在支米空軍の活動日を追ふて激しく遂に在支米空軍の対日空襲基地奪取を目的として昭和十九年春より華南作戦湘桂作戦を敢行し同年末一應其目的を達成した。

以上の様な国軍作戦指導の方針変更と共に本期に於て其指導に根本的変化をもたらしたものは前述の様な戦局の進展に伴ひ益々大となる予期せざる船舶の消耗と敵の空襲の激化であった。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

即ち前者は海上輸送力の減少と海上安全を反映して陸送移輸の要求となり後者は後方鐵道をして戰場鐵道と化し軍事作戰鐵道、鐵道隊、鐵道管理隊間一切を擧げての野戰鐵道隊化を促進するに至る。

右陸送移輸の要求は逐次

(イ) 系統連接鐵道（ケラ）鐵道の建設促進

(ロ) 大陸移輸送に伴ふ鮮滿支鐵道量輸送力の增強

(ハ) 大東亞縱貫鐵道の建設計画

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

等の指導となり敵の宣伝に対する指導としては

(イ) 直接的防空対策の徹底強化

(ロ) 軍事鐵道隊(司令部)と鐵道隊を九とする野戰鐵道隊の編成

(ハ) 南方鐵道全閣僚(司令部)の統一指揮機構の確立

等へと進み更に其後支那鐵道の軍管理、運輸省鐵道管理部門の戰斗隊化へと発展した。

二、南方鐵道

I 泰緬連接鐵道の建設

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南方攻略作戦の一段落と共に緬甸確保のため泰及緬甸を連接する鐵道建設の要求が南方軍よりもたらされた。当時既に馬来より緬甸に至る海上輸送路は「安全なるべき状態」にあり時日の経過と共に漸次危険の度を加うべきを予期されたる事であった。然し乍ら大本営は其工事の極めて困難なるべき判断の下に一時反対を表明したるであったが全般情勢の進展と其後の研究とにより之を建設すべき決し昭和十七年十月より南方軍をして之が建設に着手せしめた。

（左記要綱の下に）

左記

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(1) 建設目的　緬甸に対する後方連絡路の確保と緬甸泰間の交易交通路の打開

(2) 建設経路　泰鐵道ノンプラドック〜ケオイ河に沿ひ緬甸鐵道タンビサヤに至る約四一五粁

(3) 建設工期　昭和十八年一末完成

(4) 輸送能力　日量約三千屯

(5) 軌間　一米

(6) 所要経費　約七〇〇万円

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(ワ) 警察及労力　鐵道二関係の外現地労力供給を図る。

昭和十七年末大本営は第三部長に若松中将の就任を見ると共に

当時緬甸に於ける一般情勢から本鐵道建設工事の促進を企図し

て南方軍と協議し建設完了後の鐵道能力を三千屯より一千屯に

低下し昭和十八年八月末完成を目途に工期の短縮を命令した。

然るに酷熱未開の密林地帯に加へ近年稀に見る大雨期に

遭遇し且コレラ、マラリヤ其他の悪疫流行猖獗を極め浮腐及現地

労務者に四万人の犠牲者を見るに至り遂に予定より八月末に完成出

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

工期を延長して
遂ず十月十七日開通を見るに至った。
以上の様な困難な作業に加へ工期を急がされた開隧から開通後の輸送力は容易に緩まず其後之が整備に亦甚大なる努力を拂ったが引続き加はった空襲水害等のため最後迄所期の輸送力を発揮し得なかった事はかへすがへすも遺憾な事であった。
併し乍ら此の鐵道がインパール作戦を始めとして緬甸防衛のため果した役割は誠に偉大なるものがあり大東亜戦争の残した大工事として永く歴史に記録さるべきであらう。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

II 鐵道の整備と輸送力の維持

軍鐵道隊による泰緬連接鐵道の建設と併行して南方各地の鐵道は專ら鐵道省より派遣された鐵道管理要員の手で復旧整備を進め占領後凡そ一年で其復旧を終り各地使送の輸送力は夫々施設・輸物材料等に若干の未復旧な箇所や減少を見ながらも戰前のそれを凌駕した。

然し乍ら鐵道の復旧も整備も專ら現地資材を利用し殆ど内地より補給を行はなかつた爲宣戰後の激化と相俟つて此の良好なる狀態は長く

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は続かなかった。

昭和八年一の中頃より南方鐵道は急速に衰微の徴候を現はした。大本営も急遽に此の対策を講ずる必要を認めて内地より物動資材の配當、資材整備の鐵道省への委託　一部代替輸送等各種の手段を講じたが時既に遅く実際には大なる補給は行はれなかった。

ここに於て南方鐵道は逐次激化する空襲と相俟つて自己施設の撤去地雷により辛じて其日〳〵を過ごす迄を得ない状態となって行った。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

III 鐵道管理機構の変遷

「南方建設」の波に乗て軍政的色彩を強くした鐵道は逐次米英の圧迫を受けるに及んで漸く作戰的色彩を濃化した。

ここに於て大本營は鐵道兵力の增強並に南方鐵道全般に亘る作戰的統一運用の必要を認め 先づ昭和十九年二月南方軍野戰鐵道隊を編成して鐵道四個聯隊を增強すると共に軍事鐵道機関と鐵道隊の統一運用の態勢を確立し 次で各地の鐵道部隊と鐵道管理機関（鐵道總局、鐵道管理局等）を打って一丸とする鐵道隊の編成を行

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ふ様南方軍の指導を進めて行った。

此の様な指導を推進する途上にあって特に問題となったは其対稱となるべき南方軍の指導それ自体ではなくて従来から意見を異にした陸軍省軍政当局の考へ方を矯正し省部の意見を一致させる事にあった事はこれに皮肉とゐふべきであらう。

三 鮮満支鐵道

I 対北方作戰進備の変遷

前述した様に南方鐵道の處理の段落すると共に大本営の鐵道作戰

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

指導の重点は名実共に対北方作戦準備へと移行した。そして

其主なるものは左の様なものであった。

(1) 支那南方等に於て占領撤去した鐵道資材の北方転用

(2) 奉山線、安奉線の複線化促進

(3) 南方作戦の経験に基く対北方集中輸送の具体的研究

こうした状態は昭和十八年一杯迄続いた。

然るに翌十九年東南大平洋一方面戦局の進展に伴う国軍作戦指導方針の変換

に依って昭和十八年十月以降鐵道作戦指導の方針亦之に即応して

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

行った。

この指導方針の変換は永年対北方進出準備を目標に大陸に力を注いだ大本営の鐵道作戦指導の方針をして百八十度の大変換を強いたもので其後対北方鐵道作戦準備は完全に停止し反対に南方鐵道の整備、内地防衛及支那作戦への即應、大陸物資輸送の促進、之に伴ふ大陸鐵道一貫輸送力の増強等と云ふ形をとって対米英戦即應の指導が進められた。

II 大東亜縦貫鐵道建設計画と干漢及湘桂作戦

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

昭和十八年一末頃から大本営は　大東洋一に於ける米軍一の攻勢に呼應する重慶の總反攻を近く予期して左の様な目的の下に北中支及中南支打通作戦の研究準備一に入った。

左記

(1) B29の基地奪取

(2) 桂柳地区よりする重慶の總反攻破摧

(3) 南方との陸上交通路の打開

(4) 右の結果として重慶戦力の衰滅

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

之より先昭和十八年春頃より大本営鐵道課は逐次大東亜縱貫鐵道建設の研究に着手し秋頃に至つて漸く其成安を得時を同じくして企図された右支那作戰の研究に即應して一挙之を建設すべき具体的研究準備へ入つた。

この鐵道は東京を起点として京城奉天北京漢口河内「バンコック」を経て昭南に至るもので閩釜間を連絡船に依る事は別として其他の多くは既設線を利用し得て新線建設区間は僅かに南支に於ける柳州南寧間及佛印泰鐵道の未連接区間で夫々二五〇粁に及ばず建設は技術的には

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

極めて容易で彼の満鮮連接鐵道などの比ではない」と云ふ判断であった。

然し当時国力の現状は既に其建設資材を捻出する余力無く戦局の推移も亦之が建設及維持の兵力的負担に堪へざるに至る」と云ふ様な理由と共に作戦目的も亦B-29の対日空襲基地覆滅のみに限定されたのと相俟つて遂に此の建設を断念し鐵道作戦としては単に此の作戦に即應する程度に止むるの止むを得ない事となった。

之が為資材的に満洲より軌道材料五十粁分を転用したに止まり其他は挙げて支那派遣軍の軍需に委せられ鐵道兵力のみ所要

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の九のが増加された。　充當された鐵道兵力は左記の様に極大なもので且大部は新に編成するを要し大本營としては此の編成に特に大なる考慮を拂った。

左記

野戰鐵道司令部	一
鐵道聯隊	七
独立鐵道隊	七
鐵道材料廠	一

此の作戰は昭和十九年四月より開始され比較的順調に進んだ。鐵

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

道の占領復旧も南部平漢線の打通を同年八月完了し引続いて隴鄭線洛鄭線の建設復旧を行ひ国内漢口湘桂線方面も亦

一、桂林迄占領復旧を見るに至る。

III 大陸物資輸送と日鮮満支陸上連絡路の増強

船舶の消耗は戦局の不利と共に例へて増大し遂に従来から満洲支那より直接船舶を以て輸送した。大陸物資の対日輸送も逐次鐵道に依存するのみを得ない情勢となった。そして其要求は昭和十九年に入てから急速に増大し昭和十九年一度に於ては五万トン乃至六万トンの輸送が要

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

請された。

ここに至つて対蘇作戦為め水軍準備された大陸鐵道は乙に其逆進の形を取り対日輸送のため動員されるに至つた。同時に朝鮮後道（京義線）の複線を促進する事が急務となり大李宮とは之に満洲の対蘇作戦準備資材を流用し或は大和橋以南の連京線を撤去充当させる等大いに之が促進に努め昭和三十年二月に至つて漸く完成を見た。

此の輸送は現地宣行隊（司令部）とは事ら関東軍が中心となつて行

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は北後に於て軍事鉄道体制に於て之を管掌する点強化されて行った。

四 内地鐵道

傳統的に大陸鐵道重点の指導方針を堅持した大本営は太平洋戦争が開始された後に於ても内地鐵道に対しては之を鐵道の総司令部と考へる以外大なる顧慮を拂はなかったが戦局の進展につれて南方及支那大陸に於ける実戦の経験や大平洋戦局の見透しから漸次鐵道防衛の必要を痛感するに至り加之国軍作戦指導の方向逐次本土決戦へと移行するに及んで漸く昭和十九年一始め迄より鐵道作戦指導の重点を内地鐵

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

道へと捜索するやうになつた。

即ち昭和十八年以来緬甸及支那鐵道に対する宣撫の経験を以て逐次運搬省鐵道總局の防空指導を進めた大本営は昭和十九年夏米軍のサイパン上陸を機として本土空襲必至と判断し内地鐵道の急速なる作戦鐵道化を期して第三部長より鐵道總局に対して左の様な要項を掲げて申入を行ふなど逐次具体案を作成して行つたが其実現は容易でなく昭和二十年に至つて漸く其緒についた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

左記

(1) 鐵道隊の徹底的強化

(2) 鐵道従事員の服務規律の確立

(3) 内地鉄道の作戦的再編成

此の間鐵道部隊に関しては昭和十九年七月従来主として軍事輸送の處理を担当して居た第一鐵道輸送司令部を復帰し新に内地に於ける軍事鐵道事務を統理すべき内地鐵道司令部を新設九月には教育鐵道団次いで独立鐵道大隊八箇を編成之を隷下

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

して内地鐵道隊を編成逐次其實力を充實して行った。

五、鐵道防空

本期に於ける鐵道作戰指導に根本的変換を齎らしたものの一つは実に鐵道に対する空襲の激化であった。

昭和十七年末の兩期明けより印度方面よりする英米空軍の緬甸に対する空襲は漸次激しくなった。就中交通線に対する空襲は特に甚しく昭和十七年末より昭和十八年四、五月の頃(兩期前)迄に緬甸鐵道の輸送力は概ね三分の一に減少する実情となり鐵道防空に対して大なる

教訓を残すべきである。

此度に於て大本営は昭和十八年夏、其の鐵道幕僚を長として内地、満洲、朝鮮、華北各鐵道の技術者を配した視察団を緬甸に派遣し、この報告に基き、先づ大陸鐵道輸送協議会を東京に開き、鐵道防空要綱の一部を作制し、之を大陸鐵道の防空を強化する様指導を進め、同様に内地鐵道にも之によって鐵道防空対策の促進を要望し、逐次之を強化して行った。

緬甸鐵道に対する防空対策は右に述べた如く専に急務であったにも拘はら

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ず當なる鐵道聯隊は泰緬連接鐵道の建設に吸收されて手袋なく僅かに第五特設鐵道隊約二五〇名によって緬甸全域の鐵道確保に當て居る有様である。そこで大本營は取敢ず第五特設鉄道隊を強化するに決し（鐵道省より）川田鐵道監を長とする約一七〇名の鐵道管理隊を編成して緬甸に派遣した。次いで泰緬連接鐵道の開通に伴ひ第二鐵道監部及鐵道第五聯隊を移動し更に新に内地に於て編成した鐵道第七聯隊を緬甸に投入して鐵道の確保に當て居る。

この結果敵の宣伝攻勢激烈を加ふるに拘はらず鐵道隊の成果劃

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

期的に上り緬甸方面軍の作戦の要求をも充足し得て緬甸鐵道隊の
防空必勝の信念を確立させた。
此の様にして大本営は緬甸鐵道に対して兵力増強の處置を講じ現地に於け
る鐵道部隊も亦よく奮斗して其実力を国軍一般に認識させたが資材
の補給に至っては殆ど実施する事が出来なかった。之が為南方鐵道は
其防空対策用資材を南方鐵道自体に於て相互融通し要度の
少ない線路を撤去特用するの外無い状況となり終に「鐵道を防空的乃
至作戦的ト再編成」する所迄に之を強行して行った。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

こうした「鐵道再編成」の考へ方は内地鐵道等に適用されたが直接国民生活、生産擴充と結びついて居る内地の鐵道にあつては軍の強力な要望に拘はらず容易に断行するの域に至らず漸く本土決戰必至となる昭和十年に至て極一部の鐵道がこの対象となつたに過ぎなかつた。

六 鐵道部隊の増強と之が運用方式の変換

I 鐵道部隊の増強

開戰前前章に於て述べた様な態勢にあつた軍事鐵道特に及

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

鐵道隊は ~~大東亜~~ 太平洋戦争の進展に伴って一般兵団は逐次増強されたのにも拘はず殆ど変化無く僅かに昭和十八年末迄に於て野戰鐵道司令部一、鐵道輸送司令部一、三の増強された外特に鐵道隊の増強は昭和十九年に入る迄実現を見なかった。

鐵道隊が増強されなかった理由は左記の通りであるが特に器材の不足が決定的であった。

左記

(1) 大東亜全域に亘り建設期に入り国軍全般として現実的に鐵道隊の

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

必要を痛感させなかった

(2) 人的資材的準備特に部隊装備用器材の準備が殆どなく編成

余力が無かった

同時に見逃し得ない事は大本営鐵道作戦指導の方向があまりにも

大陸に固定し現実の作戦を消滅離れて居た事で鐵道作戦

指導の方針と矛盾して一般作戦に即應する態勢を採り、(あった。此の為 且又) 緬甸

鐵道隊の戦績から鐵道作戦に対する国軍一般の認識が深まり

鐵道確保のため鐵道兵力の必要性を痛感させるに至って逐次鐵

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

道部隊増強を見ることになる。

此の際に於て右第二の理由は之が打開に極めて困難であったが大本営は遂に止むを得ざる考へ方として

イ 装備は鐵道の確保若くは特殊任務に應ずる最少限として極度に之を低下す

ロ 人員は現鐵道従事員中の他兵種又は他兵種に召集服務中の鐵道従事員を召集又は増傭流用す

（イ、右に伴る装備の低下訓練の不足は編成人員の増加、特務編制の採用によって之を補ふ）

とゝふ方策の下に之を解決して昭和十九年三月

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南方鐵道防衛用として　鐵道聯隊　二

佛印　泰鐵道警備用として　鉄道聯隊　二

支那作戰用として　鉄道聯隊　四

特種鉄道大隊　七

鉄道材料廠　一

を編成したのを始め逐次増強されたが従来其優秀を誇る鐵道部隊の整備も逐次低下して遂に無裝備となり一聯隊約二五〇名の定員は三五〇名となり万能大隊又は中隊によって充たされた。聯隊編制も特殊大隊又は中隊の編制を採るもうになった。加之聯隊長級要員の不足は従来總て聯隊編制によって鐵道部隊を編成せる鉄道大隊の編成を行ふやうになった。

そして最後の時期には未教育兵による鐵道部隊の編成を行はざるを得なかったがこれこそ編成要員器材共に全く底をつき且本土決戰準備に一日の猶予なき事を思ひの情勢に於て且教へ且戰はんとした全く窮余の一策であった。

II 鐵道部隊運用方式の変換と總軍聯戰鐵道隊

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

太平洋戦争当初軍事鐵道隊及鐵道隊は夫々指揮下の線
軍若は方面軍の隷下にあり各別箇に運用されたる事は前
章に於て述べたる所であるが敵の空襲激化と国軍の作戦が次
第に作戦より防衛作戦へと移行するに伴ふて軍事鐵道業務の重点
を「軍事鐵道指揮官」にあつた輸送、鐵道隊は鐵道の占領復旧
と云う考へ方から（夫々別箇の）両者共に「鐵道及鐵道輸送の確保」へと特徴
させ其上鐵道の戦場を前線後方の別無く大東亜全域の鐵
道に擴大し（四）其鐵道確保のため鐵道隊の実力を増強させるやう

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

になり漸次右両者を統一して運用する必要を痛感することになった。

かくして昭和十九年(大東亜戦争末期)二月鐵道部隊の劃期的増強を期し右統一運用方式を採用するに決して関東軍、北支那方面軍、第六方面軍、南方軍に夫々軍事鐵道隊(隊司)及鐵道隊を統合して野戰鐵道隊を編成、其野戰鐵道司令官をして統一指揮せしめることになった。

当初編成された野戰鐵道隊の編成は概ね次の通りである。

左記

1. 関東軍野戰鐵道隊

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南方軍司令官 ~~南方軍~~ 同東軍野戦兵站司令官

同東軍野戦兵站司令部

同東軍第三鐵道隊

第三兵站監部

鐵道第三、第四 聯隊

第三兵站材料廠

鉄道第二聯隊

第二鉄道材料廠

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

停車場司令部　若干

2 支那派遣軍第一野戦鉄道隊（北支那方面軍隷下）

司令官　第二野戦鉄道司令官

第二野戦鉄道司令部

第二鐵道輸送司令部

鐵道第六・第十三聯隊

停車場司令部　若干

3 支那派遣軍第二野戦鉄道隊（第六方面軍隷下）

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

同令官　第四野戦鉄道司令官

第四野戦鉄道司令部

鉄道第一　第三　第十二（第十四）　第十五　聯隊

（内鉄道第三聯隊は満洲より移用）

第一　第二　独立鉄道工務大隊

第一　第二　独立鉄道橋梁大隊

第一乃至第三　独立鉄道工作隊

第四鉄道材料廠

停車場司令部　若干

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

57

南方軍野戦鐵道隊

同令官　南方軍野戦鐵道司令官

南方軍野戦鐵道司令部

第六鐵道輸送司令部

第二鉄道監部

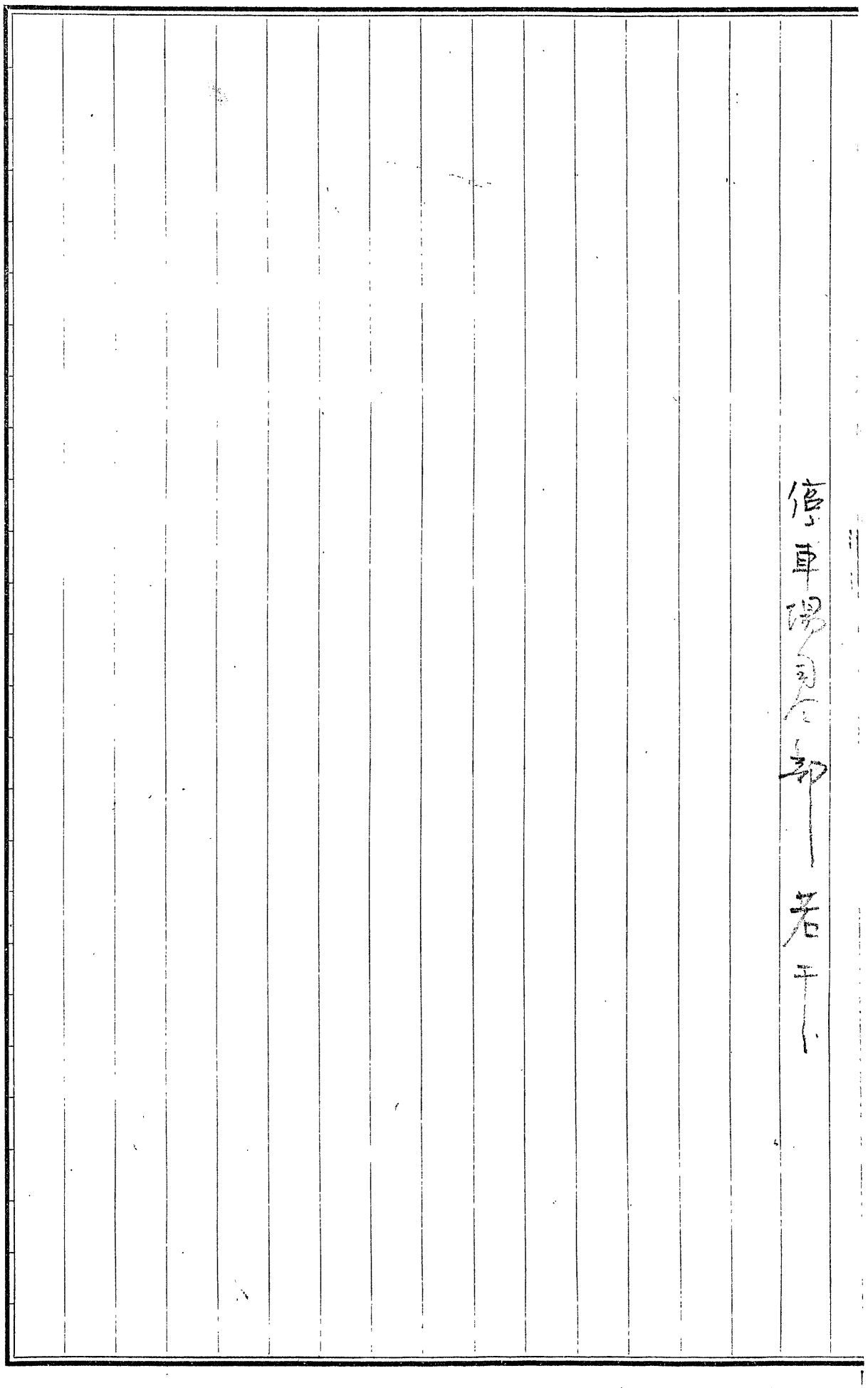
鉄道第五、第七乃至第十聯隊

第四、第五特設鉄道隊

第一鐵道材料廠

陸軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp